

2022. 12. 18. 主日礼拝説教

聖書：ルカによる福音書1章39-56節

『喜びのわかちあい』

「牛にひかれて善光寺まいり」という諺があります。クリスマスだからということで子どもに引っ張られて教会の礼拝にでちゃったというニュアンスで受け止めていましたが、少し違うようです。国語辞典をみると、善光寺の近くに住む老婆が、牛の角に引っかけられた布を取り返すために牛を追いかけて善光寺まで来てしまい、そこで信仰心を起こしたという伝説から生まれた話で、自分の自発的な心からではなく、他人の誘いや偶然の原因で良い方へ導かれることの譬えと記してありました。河合隼雄さんの「カウンセリングを語る」という本には、非常に欲深な老婆がヒョコヒョコ歩いている牛を見つけて、自分のものにしようとして追いかけてゆく、すると牛は逃げる。また追いかけてゆくと逃げる、を繰り返している内にとうとう善光寺まできてしまって、そこで宗教的な体験をした話だと書いてありました。共通しているのは、おばあさんが利己的な考えで失敗を繰り返している内に、本質的な問いに出会って利害を超えた決断をさせられたということです。

今日の聖書の箇所少し前の24節で、マリアは天使のお告げを聞いた時に戸惑い「どうしてそんなことがありえましょうか」と嘆きました。どうしてそんなことが、どうしてそんな突然の不幸がこの私に、と思って苦しんだのです。天使は一方的に「おめでとう。恵まれた方」などと言うけれども、まったく恵まれていない出来事であり、夢も希望も打ち壊されるような知らせだったことと思います。しかも天使はそのことを「恵み」だと言ったのです。36節以下でマリアはエリサベトのことを引き合いに出されて渋々承知したところから、いよいよ今日の聖書の箇所へと続いてくるわけです。

39節でマリアはエリサベトと出会います。これはひとつの体験を共有している者同士の出会いでした。ここで大切なことは先行者が後の者に伝えるということなのです。何を伝えるのか。わたしたちはともすれば苦労話や不安を伝えたがりです。エリサベトも24節で5ヶ月も身を隠していたというくらいですから、さぞや気苦労も不安感もあったことでしょう。けれども彼女は若いマリアにそん

なことは伝えませんでした。エリサベトが伝えたのは、そうした現実を踏まえた上での「喜び」でした。その伝えに対してマリアも不平や不満で応えるのではなく、喜びをもって応えました。それが46節以下のマリアの賛歌でした。喜びをわかちあう時、神への賛美が生まれるのです。

赤ん坊が生まれるとき、すべての親は元気で生まれて欲しいとだけ願います。しかしやがて、頭が良かったらとか人より優れていたらとか不満な気持ちになることがあるのではないのでしょうか。しかしもしその子が死んだなら、成績なんかどうでもいい、生きていてくれさえすればそれが私の一番の喜びだったと気付くのです。恵みだと思っていたものを失って、初めて人は本当の恵みに気付くのです。

クリスマスはすべてが思い通りになったり、自分を有能だと思っているひとには来ません。どうしてこんな事がと嘆いている人のところに「そうではない。今あなたは最も恵まれているのだよ」と主は語りかけに来られるのです。マリアとは物語や他人事ではなく、わたしたち一人一人の姿です。思い通りいかない事の中で「力ある方が、私に偉大なことをなさいました」と歌える人生に導かれましょう。ともに喜びをわかちあいつつ・・・。